

## 2. 大日本水産会報にみるアメリカの水産情報

1894(明治27)年の『会報』4月号には興味深い記事が掲載されている。この年3月、朝鮮での甲午農民戦争を契機に日清両国が対峙するようになり、8月には日清戦争が勃発する。4月に入って、水産伝習所では33名が第6回の卒業生として巣立っていくが、そのなかの福岡県出身である永延虎八郎と圓入参之介の2人が漁業のため英領カナダに渡った。1885(明治18)年より英領カナダに移民として渡った群馬県出身の相川之賀は農業や漁業を営んでいたが、現地で最も将来があると期待される漁業には専門家がいなかったため、相川はわざわざ帰国し伝習所卒業生に働きかけた結果、2人の渡米が実現した。『会報』雑録に掲載された「水産傳習所生徒の外國行」の記事は、対外貿易や遠洋漁業、移民などが話題になり水産教育においても海外情報や知識が重要になってきた。

1896(明治29)年は、小谷源之助・仲治郎兄弟渡米の前年であり、また野田音三郎らがモントレイでの採鮑業を進めていくために、日本の農商務省からの支援や助言を求めたという言い伝えは、それを裏付ける資料が今のところ見つかっていない。ただ、この年にはアメリカの水産業の記事が多く注目すべき情報もあった。1893(明治26)年の大日本水産会会員名簿に記載がある会員小谷仲治郎が『会報』を購読していれば読んでいたであろう。なかでも1896(明治29)年の『会報』から重要と思われる情報や、鮑漁業に関わって仲治郎も目を通したと思われる記事を取り上げてみたい。

一つ目は『会報』172号(10月号)の雑録にあった「アルトバドス號調査員の講話」という記事である。内容は「北太平洋膾舘獸及其獵業調査の爲め派遣せられたる米國水産調査船『アルトバドス』號は其調査を了へ今度横濱寄港碇泊したるを機とし九月十八日農商務省高等官、帝國大學、中央氣象臺員及大日本水産會及水産傳習所員等二十餘名にて同號乗組員及米國公使領事等を招待し芝紅葉館に於て懇親の宴を開きしが水産傳習所に於ては同號乗組調査員『ドクトル』エル、スティニーゲル氏を聘して同所生徒の爲めに一場の講話をもとめたりしに氏は快く承諾し十月五日來所して膾舘獸並其獵法に關し講話されたり同氏は米國『スミソニアン、インスチ、ツューション』爬蟲類兩棲類菅督の任を帯ふる由其講話は當日水産調査所技手大瀧圭之助の口譯を筆記して本號論説欄に掲げたり」である。

この中の米國水産調査船『アルトバドス』号については、『続・明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流』(以下『続・源流』)において、「1896(明治29)年に米國蒸氣調査船アルバトロス号(ジェフラーソン・F・モーサー中佐指揮)が日本近海に調査活動に來たが、外務省史料に1897(明治30)年『膾舘ノ棲息研究ノ米國理學者汽船アルバトロス号ニテ千島群島へ越キ度旨同國公使ヨリ申出一件』(国立公文書館・アジア歴史資料センター)があり、そのなかに米國公使より調査でお世話になったと人物として、『農商務省水産調査所 所長藤田四郎 岸上鎌吉 大瀧圭之介』の記載がある。」と述べた。調査船乗組調査員、つまりアメリカの水産研究者が10月5日に水産伝習所に向いて生徒へ講話をしている。その際にスタフォード大学ジョーダン学長やモントレイのポプキンス臨海実験所と関わっていた水産調査所技手大瀧圭之助が通訳をし、10月15日には当『会報』に講演録が掲載される素早さであり、当時のアメリカ水産情報に対応する向き合い方がわかる。

二つ目に『会報』174号(12月号)の雑報のなかに「米國漁業雜誌發行者の書信」との一文があり、その内容は「米國紐育市に於て毎週發行する漁業雜誌は水産實業上有益なる好雜誌なるが近頃同誌發行者ジェー、イー、ゼンニング氏より大日本水産會へ同誌五十部と共に書面を寄せ自今同誌發行毎に同誌を寄贈するを以て同会々報並其他参考となるべき圖書の寄送を依頼し且彼我水産上の事項に付相互通信を開き度旨を申越し今回送附したる同雜誌は三重縣第六回品評會及第二回水産博覽會關係者へ頒布方を依頼し尚同氏は明年は成るべく水産博覽會を參觀したき旨申添へ同會

よりは來意承諾の旨を答へたり 因に云ふ事項漁業雜誌 The Fishing Gazette と稱し毎週一回發行する水産雜誌にして壹ヶ年郵税共二弗五拾仙なり購讀を望む者は前金を添へ左の處へ申込まるへし G. E. Jennings. 317 Broadway, New York, U.S.A」というものである。この記事からいえることは、英語を読み書きできればアメリカ漁業雜誌を手に入れて、水産情報を知ることによって民間レベルでの交流ができる時代になってきた。仲治郎も渡米する前の準備として、アメリカで発行されている漁業雜誌を読んで、現地の漁業情勢を把握していたと考えられる。

三つ目に同じ12月号には、伊藤一隆の論説「米國水産の話」(月次小集會演説)が掲載されている。『続・源流』では伊藤を「…当時の米國の水産調査データは農商務省の漁業や水産政策をつくるうえで欠かせないもの…水産研究では明治初期より米國からのお雇い教師を招いたり、米國留学したものを官吏に…米國の水産を調査報告した北海道の水産技師伊藤一隆…1886年に米國の水産調査のため出張し、巾着網の調査をして試作と試験操業をし…1888(明治21)年には千歳にさけ・まず孵化場を設置…伊藤の調査報告には米國における鮑關係の資料はない…1890年代頃より…日本側は米國の鮑の水産事情を正確に把握するようになった」と紹介している。

大日本水産會学芸委員という立場にあった伊藤が、1896(明治29)年の時点でアメリカ水産業を見聞してきた最新情報を講演した。その「米國水産の話」では、鮮魚の貯蔵法では今日、器械的冰凍法に大きな進歩があり、魚類ばかりでなく保存により腐敗する品物は冷凍や冷蔵の部屋に保管し、大きな冷倉庫まで造られている。とくに魚類などはアンモニアが液体から気体になる変化を応用した「コンプレッション・システム」(圧迫法)であり、生魚の保存方法や運搬、販売などに影響をもたらしている。現在のアメリカ社会では魚類などの商品化や流通、貿易にも大きな変化が起こっていることを伊藤は伝えている。世界の動きを見ながら大日本水産會員たちにも水産分野の技術革新を知らせていく啓蒙活動のなかで、仲治郎が激動する世界に目を向けていったことは間違いない。

1899(明治32)年3月、水産伝習所の500名近くの卒業生たちは同窓會を結成し『水産同窓會誌』を發行した。その第1号には「米國ノ鮑」という題で次のような記事が掲載された。「米國ノ鮑 頃日米國かりふをるにやヨリ歸朝セシ鈴木某氏ノ談話に據レバ桑港ヲ距ルコト南方約六十哩余ノ海岸ニ於テ鮑ノ棲息所ヲ發見シ本年右採取ヲ試ミタルニ頗ブル繞産シ是ヲ明鮑ニ製シ在米支那人ニ試賣セシモ意ノ如ク聲價ヲ高ムル能ハズトテ右見本携帶ノ上歸朝セリ全品ヲ見ルニ至テ大形ニシテ乾燥色澤其ニ可ナリ然レトモ其形状不整ナルアリ之ヲ試食スルニ味ヒ内地産ニ大差ナシ其種類ハ介殼等ノ見本ナキ為メ判別スル能ハザルモ内地産またか種ノ稍々長形ナルモノナリ要スルニ其製法ヲ今一層改良スルニ至ラバ清國輸出向トシテ價值ヲ昇スルニ至ラン又同産地附近ノ一帶ハ山脈連續シ且樹木繁茂スレバ薪材充分ナリ加之空氣至テ乾燥シ物ヲ乾燥スル極メテ都合宜シト又同海底ニハ昆布科ノ海藻非常ニ多キヲ以テ沃度ヲモ製造スルノ見込ナリトテ夫々調査中ナリト云フ全地ノ位置ハ恰モ内地ノ四國邊ニ相當シ氣候モ極メテ温暖ニシテ魚類鯨族ノ如キ極メテ多ク實ニ有望ナリト云フ氏ハ東京京橋區木挽町六丁目一鹿島組ニアリ三月頃迄滞在ノ見込ニシテ是非水産ニ經驗アル方一名雇聘シ益々進ニテ斯業ヲ擴張セトンノ計畫ナリト云フ」という内容である。

この記事はアメリカ帰りの「鈴木某氏ノ談話」という形で聞き取ったもので、本人が1898(明治31)年末頃に見聞した出来事と思われる。まず「桑港ヲ距ルコト南方約六十哩余ノ海岸ニ於テ鮑ノ棲息する所ヲ發見」とはモントレー海岸を指しているものの、現地の野田や井出、小谷兄弟らの名前がなく、どんな形の漁業であるかが語られていない。また、乾鮑(明鮑)「製法ヲ今一層改良スルニ至ラバ」清國の輸出向けにすると具体的なことが述べられ、さらに「水産ニ經驗アル方一名雇聘シ益々進ニテ斯業ヲ擴張セトンノ計畫」とあるが、現地の会社から直接、依頼されたのだろうか。

さて「鈴木某氏」とは誰なのか。ヒントは水産や鮑のことに詳しいうえに、『同窓会誌』に登場する人物なので卒業生の「鈴木」と思われ、周りに海外に渡っている同級生がいる人物と想定される。すると第6回卒業生に青森県出身の鈴木雄という人物がいて、1901（明治34）年の『同窓会誌』1月号の名簿には、小谷仲治郎のモントレイの住所や前田謹一郎のハーバード大学在学とともに、鈴木雄の名前があり在米と書かれていた。

このようにモントレイの採鮑業のことは、1900（明治33）年前後に『官報』や『同窓会誌』などに取り上げられることになるが、官庁や水産関係者の目に若干触れる程度で、しかも小谷兄弟などの渡米鮑漁師たちのことはまったく知らされず、取り上げられることもない出来事であった。しかし、丹念な資料調査をすると、これまで見逃していた重要な事実が発見できる。この1899（明治32）年3月発行の『水産同窓會誌』第1号の「米國ノ鮑」は重要な資料であるが、大日本水産会員で同窓会員である小谷仲治郎のことがまったく記載されていないのが極めて残念である。